

ヘーゲルにおける哲学の決意

河合佳澄

参考文献真下信一他訳『ヘーゲル全集 第1 哲学体系 1 小論理学』1996 岩波書店

「哲学しようとする決断はきっぱりと思惟へとびこんでいく、(——思惟は独りでそれ自身のもとにいる) ——それは涯しない大海原にとびこむような決断である。あらゆる多彩なもの、あらゆる支点は消えうせ、あらゆるいつもの親しい光はかき消されている。ただ一つの星、精神の内なる星が輝いているだけである。それは北極星である。」

1、ヘーゲルの哲学——弁証法の円環

哲学は宇宙のように自身において円いものであり、最初のところも最後のところもそこにはなく、かえって一切のものは相互に、そしてひとつのものうちに支えられて保たれているのである。

2、決断するまで——哲学の欲求はどこから来るのか

哲学の本来の欲求の根底にあるものはどんな(思惟する)人間にもあらかじめある。

- ①感性的な認識、欲求と衝動
 - ②彼の前には一つの外的世界がむき出しにあらわれる
 - ③彼のもろもろの欲求と好奇心が彼をその世界へ駆り立てる
→この立場は彼らを満足させない。
 - ④本能的に彼のうちにある理性的なものとそれへ向けられる省察とが彼をこの現象する世界の普遍的なものへ、また根源的なものへ導く。
- ◎自立的な普遍的法則の理念、ある恒常的なもの、ある絶対的な存在者という理念のうちに、じじつすでに哲学の始まりがある。

3、哲学と真理の国

(1) 真理の国こそは哲学の本来のすみかであり、哲学のうち建てる国であり、そしてわれわれは哲学の研究を通じてその国の住人になるのである。

- ・生活の中の真なるもの、偉大なもの、神的なものは理念によってそうである
哲学の目標：この理念をその真の姿と普遍性において把握すること(真理の認識)
※純粋な理念——混じりけがない(表象—感覚的なものが一切ない)

- ・人間生活を統括している一切のもの、価値と意義をもつ一切のものは精神的なたちのものであって、この精神の国はひとりただ真と正にかんする意識によってのみ、理念の把握によってのみ存在するのである。

(2) 哲学は在るところのものを認識する。

- ・その内容は彼岸にあるのではなく、感官、外的また内的感覚にあらわれるもの、知性が把握してみずから規定するところのものと別ものではない。
- ・真の在り方は思惟する理性（思弁）にのみあらわれる。
- ・在るところのものは即自的に理性的であるが、まだ人間にとって意識にとってそうなのではない。思惟のはたらきと運動によって初めて彼のものとなる。

◎人間が世界を眺める通りに世界は人間を眺める。

◎彼が理性的に眺めるかぎりでのみ、それは彼にたいして理性的な姿をとる。

4、真理への勇氣

差し当たり私としては諸君が学問への信頼、理性への信念、自己自身への信頼と信念をもってきてくれることを要求しうるだけである。

- ・哲学研究の第一の条件：真理の勇氣、精神の力への信念
- ・人間は自己自身を敬い、そして自己を最高のものにふさわしいものと見なすべきである。

◎宇宙の閉ざされた本質は認識の勇氣にさからいうるいかなる力をも内にもたない。

それはこの勇氣の前に開かれ、その富とその深みを眼前にさらけて享受させるにちがいない。

5、大海原に飛び込む

親しい光の脱落

- ・それまで意識が慣れ親しんできたそのほかのあらゆる支点がおよそ脱落する。
- ・われわれの通常の表象作用においては、われわれは意識にとっていつもはあらゆる場合に存在し続ける基礎をもっている。
- ・われわれの表象作用のなかでわれわれに知りなじまれているものの全範囲がひっくり返るめて一般的分別、常識と呼ばれる。
- ・人間は平素の生活のなかでそれらにのっとなってやっていき、判断するのである。
→一種の先入見
- ・哲学においては常識では足りない。哲学はむしろあらゆるこれらの支点、これらの習慣——生活と思惟とにおいて常識が平素、依りかかっている世の中の慣れた見方、真、正、神についての常識的な概念を放棄するのである。

6、ただ一つの星、精神の内なる星が輝いている——北極星

- ・これまで拠りどころとしてきた常識（感性）を捨てることで開かれる真理の世界。
認識の勇気により開かれた宇宙の本質。

7、まとめ

われわれは真理を認識することを望んでいるし、真理は常にわれわれのそばにある。しかし、われわれの生活の中においては表象（感性、主観など）により真理は閉ざされた状態となってしまう。それを認識するためにはこれまでのそういった常識を一度捨て去る勇気が必要である。それらを捨て去って理念、思弁でもって世界を見れば、世界はそれに応え理性的に見せられる（真理が開かれる）。それは大海原にとびこむようなものであり、これまでのあらゆる支えを捨てねばならない。そしてそこにはただ一つの精神の内なる星が輝く。それはわれわれに開かれた真理の世界である。われわれは哲学することによってそれを認識し、そこに近づいていくのである。

8、結びにかえて——青年の精神

- ①必要に迫られた限られた諸目的の体系にまだ捉われていない
- ②それ自身、利害関係抜きで学問的な仕事をする自由をもっている
- ③空しさの否定的精神、たんに批判的なだけの辛苦の内実のなさにはまだ捉われていない
- ④健やかな心——真理を求める勇気をまだもっている